
妖説話 Misfortune Always With The Devil

アマノアキマサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖説話 Misfortune Always With The Devil

【Nコード】

N9755V

【作者名】

アマノアキマサ

【あらすじ】

不幸な少年：正善始。ある日悪魔に出会い、さらに化け物たちにならわれたり……

プロローグ

今日、学校で

『不幸な人間は、死ねないから不幸なんじゃない？』

と、僕の幼馴染がと○るを読みながらそんなことを言ったものなの
で、おバカが

『じゃあ、始^{はじ}め長生きするな』

と言ってきた。

.....これに対して

あつそういう考え方があるのか——と、納得した僕が一番バカだ
った.....。

その帰りにトラックにはねられました.....

……死んだな。と、僕が全身をかける激痛と俗にいう走馬灯とおぼしき現象に襲われているとき

「余に助けてもらいたいか？」と、いう声が頭に響いてきた。

僕はそのかわいらしい声^{アクマの}が放った質問^{契約}に返事をしてしまった。

もちろん、肯定の返事を。

1話「不幸中の大不幸」(前書き)

目標週一更新

1話「不幸中の大不幸」

チュン…………チュン…………。

ベタなことに鳥のさえずりで目が覚める僕。

「……………夢だったのか？」

僕の記憶では今さっきはねられたところのはずだ。しかし、僕の中にはかすり傷一つない。

念のため制服をみてみる。血が付いているところもなく、きれいなままだ。

「……………やっぱ……………夢か」

しかし、リアルであんな激痛を味わった夢は初めてみた。

「はねられたのが、ゆめでよかったわ」

と安心して時計をみる。

8時15分……………自宅から学校までダッシュで20分ぐらい

(自転車は先日壊れた)なので遅刻だああああああああ。

「あんた遅刻何回目よ。このペースだと進級できないんじゃない」と、我が幼馴染^{まき}染巻^{ふたば}は昼休みにランチルーム縁起でもないことを言ってきた。まあ、事実だけれども！

「フタバちゃんが起こしに行つてあげたら。夫婦なんだし」とあほなことをぬかす希望^{おバカ}あんみつ。

幼馴染〃夫婦という発想が許されるのは小学生までだ。

と、ツツコみを心の中で入れていると……脇腹強力な一撃が入った。

「だ誰と誰が夫婦よ。こいつはただの腐れ縁の幼馴染……！」

僕がうめきながら犯人のほうをみると、顔が真っ赤だ。

そうやって真っ赤になって否定するからみんなに誤解されるんだよ。

「なんかいったか、始！」

しまった声に出していた。殺される。

「な、なんにもいってない」

「そう、ならいいけど」

よかった！聴きとられてはいなかったか。命拾いした。

「……………（間抜けばかりだな）……………」

「！？」

「どっしたハジメ？」

「いや何でもない」

もちろん何でもなくはなかった。このとき僕は気付かなかったがあの声は聞き覚えのあるものだったのだが。

「なんでもなくてしょ」

「そうよ。こんなに不気味なのに何にも感じないなら、医者に診てもらったほうがいいわよ……………生きて帰れたらだけど」

「はあ？……………」

二人に言われてやつと気付いた。

まだ昼なのにあたりは薄暗く空気はよどんでいるようだ。

「警報なし……………ってことは鬼襲か。不幸ね。ここ10年ほど起ってなかったのに……………あんたじゃないけどほんと不幸」

「……………あ、八光高校2年の希望あんみつ。八光高校にて鬼襲のゼンチョーと見られるゲンショーを確認しました」

二人ともケータイをいじっていた。やば、僕何にも出来なかった。だから現状を説明しておこう。

日光、月光、照明などの光源から放たれている光が、妖気などにさえぎられ明度が下がる。また、妖気などが空気と混ざることによってよどむ。

これらの現象を「開門」といい、異世界の扉が開くことによって起こる。

そして「扉」は開く数時間前から妖気など蓄える。

そのため、その力を分析すればいつどこで開くか知ることができる。だがまれに力を蓄えず「扉」が開くことがある。

それを「鬼襲」とよぶ。

ここ10数年起つてなかった現象だ

なぜ奇でなく鬼なのかと聞かれると、この突発性の「開門」は、知性の低い化け物つまり人をむやみに食らうものを人間界に連れてくることが多いからだ。

鬼が突然思ってもみないところから襲ってくるから「鬼襲」と呼ぶのだ。

だから僕らは命の危険にさらされている現状だ。はい、説明終了。

「こら、ぼつとしてないで逃げるよ」

「ああ」

「ワタシまだ死にたくないね」

僕ら三人は急いでランチルームから避難教室に向かった。避難教室には対化け物の結界が張ってあるらしく、非科学的現象のとき一番安全らしい。

事実かどうか確かめようがなかったが今日真偽を確認できそうだ。

まあ、目の前にいるゾンビのようなやつらにつかまらなかったらだけれども。

「チッ。校内にはすぐ入ってこられないんじゃないかなかったの！始！箒とって！」

双葉に言われた僕は、近くにあった掃除道具入れから箒を三本とり、

双葉とあんみつに渡した。

双葉はゾンビをなぎ払った。だがゾンビはうたれ強いうえに数が多い。ここは引き返すべきだ！

「戻るべき！」

あんみつが正論を叫んでくれたおかげで双葉ゾンビに構うのをやめ、僕らはランチルームのほうに引き返そうとするのだが、ゾンビはこちらのほうからも来ていた。

「」「逃げ場がねえ！」「」「」

これも夢であればいいのに。

1話「不幸中の大不幸」(後書き)

この後どうしよう

2話「絶対憑かれてる」(前書き)

勢いで書くとうまいかん

2話「絶対憑かれてる」

『ゾンビ（リビングデット）』…生ける屍。肉食。化け物の中で最も知性の低い部類に属す。たいへん危険な生き物。であつたら逃げる事。

そんな化け物と遭遇し、なおかつ逃げ場がない現状。絶望的だ。だが今この状態がどうも実感がわかない。まるで自分には関係ないことのようなのだ。

どうした僕もうちょっと緊張してもいいんじゃないか！

「あゝあ、あんたらと死ぬのははつきりいつていやだな」

「だったらハジメおいて逃げようぜ」

……………緊張してないのは僕だけじゃ無かったよ。

「……………死ぬ覚悟ある？」

「「ない」」

「僕もないけど、どうやって切り抜ける。この絶望的な状況を」

「「思いつかん」」

「いつも思っけどどうして息ぴったりなの、きみら」

「「知らん」」

……………このまま質問し続けると永遠に終わらないな。

「質問はもういいの。ハジメ？」

「ああ」

「じゃ、次なにすべきかわかるわよね？」

「ああ」

「気合い入れて――」

「「サバイバルタイムだ」」「」

「怪我したところとかない？」

「「大丈夫です」」

何とか生き残った。本当になんとかだった。後一分でも退魔師が来るのが遅かったら確実に死んでいただろう。僕ら三人は。

今回の事件でうちの学校は防災訓練がしっかりしていることが判明した――が、

「ありえないありえないありえない！！ど・う・し・て、避難教室内で鬼襲が起こったのよ！みんな殺す気か！あの学校！」

双葉が吼えるのは当たり前のことだった。鬼襲の発生を取材しに来た記者や保護者も、学校側の意外な発表にギャーギャー騒いでいた。「結界は外からの侵入対策ヨーで教室内は霊的シユゴはなかったとか………… ホントに死ねと？」

二人ともご機嫌斜めだった。こういうときは黙っているのが一番だ。口をはさむと八つ当たりされる。

「でも、おかしいよね」

「何がよ」

「死人が出なかったことだよ」

あんみつのやつバカなのに、そんなことは気付けるんだな。

「たしかに。三階の避難教室から僕らのいた一階渡りまで距離結構ある。あの食欲旺盛なゾンビたちが逃げる生徒に目もくれず一階まで下りてくるものなのか？」

「今日始めて実物目にしたあたしらにわかるわけないじゃない！あと今回の常識をくつがえすような行動だったなら、原因はあんたよ！始！」

「そうだ。きつとハジメがオイシソーだったんだ」

「なわけあるか！」

「おいしそうではないけどあいつらが狙ってのはあなたよ」

「「「！！！！」」」

「驚くことないんじゃない？人外なら気配消すくらい簡単よ」

「あんた何よ？」と双葉は威嚇するように尋ね、

「警察呼ぶぞ！」とあんみつは、ずれた発言をする。

「威勢がいいわね、お嬢ちゃん達。わたしは、ローズ。神獣よ。正善始、あなたを殺しに来たわ」

ゾンビの次に神獣と来たか………僕呪われてんのかな？

そんなことを考えていた隙にローズは僕との間合いを詰めており、人ならざる腕を振りおろそうとしていた――

「どいつもこいつも身の程をわきまえん阿呆ばかりで困るの」

どこからか威圧感の強い声か聞こえ、ローズが蹴り飛ばされた。
二人と一匹(?)は驚愕の表情を浮かべた。
僕もとっても驚いている。だって、

僕の足が蹴っ飛ばしたのだから。

2話「絶対憑かれてる」(後書き)

ありきたりな展開な気がする…

感想とかあったらください

3話「悪魔の少女」(前書き)

一日遅れてしまった

3話「悪魔の少女」

「これは、余の器だ。傷つけることは許さん。去れ、神の獣よ」

僕の口は勝手に動きに言葉を発した。

「あなたは誰かしら？その子は、わたしたちやあなたみたいな人外にとつて害になりうる存在よ。あなた、わかつてるの？」

「余と御主らを一緒にせんでくれるか。それにこれの力を詳しくは知らんのだろ？だつたら去れ。それとも悪魔と戦つて勝てるのか？」

「っ！悪魔ですって！？……う！……いいわ、引いてあげる。
でも次は殺すわ」

「（家に戻つたら説明するとあの女子おなこどもに伝える。さもなければふたりとも殺すぞ）」

神獣が去つた後、悪魔は僕にそういうとしゃべらなくなった。どうやら僕に主導権を返してくれたらしい。

悪魔に言われた通り、ギヤーギヤー騒ぐ双葉とあんみつをなんとか（本当になんとか）説得し、家に来てもらった。

我が家は両親とも仕事で日本にいないことが多いので、僕が一人で暮らしている。

二人にお茶とお菓子を出すと

「で、説明しなさいよ。いったい何なのさっきの！」

「そうだぞ。菓子だす前にセツメーしろ！菓子は頂くがな」

「ええ」と。僕は何にも説明できないな」

「安心しろ。余が説明してやるから」

「……！……」

いつの間にか悪魔は僕の隣に座っていた。だが、まがましい姿でない。少女の姿をしていた。だけど、妙な威圧感を放っている。たぶん自分の存在を主張するためだろう。

「あんだなんだ」

一番初めに質問したのは双葉だった。きっと前世は勇者なのだろう。

「余は夜空。悪魔だ。こやつは契約者だ。」

と、悪魔の夜空は僕のほうを向いた。

「……」

僕を含めて全員沈黙。だってそうなるよね？友達が悪魔憑き（悪魔と契約している者または悪魔に憑かれている者）だったら言葉を失う。

僕も、契約はおろか召喚もした記憶もないのだから悪魔の主張は理解できない。

「………始。いつから………」

「おいおい、身近にキョッケー者の犯罪者がいるとは思ってもみなかったな……」

「二人とも僕が悪魔と契約したとおもってる！僕は無実だ！契約なんてしてない！」

「したろ？」「余に助けてもらいたいか？」という余の問いに対して、お主は首を縦に振った。肯定の返事だろ？それとも何だ、今の日本では通じんのか？」

……この悪魔がいうことが事実なら昨日のあれは現実？

「どうゆうことよ！正善始に悪魔が憑いているなんて聞いてないわ！」

わたしは仲間に抗議していた。八つ当たりなんだが

「落ち着きなよ。ローズ。サンフラワーはあれが危険なことしか予知してないんだよ？」

「そうだぜ。悪魔が憑いてるから危険なんだってことかもしれないだろ？」

二匹とも正論。だから余計腹が立つ。

「そうだけどね！悪魔のせいで火傷したのよ。蹴られただけで！しかも治りが遅いのよ」

「へえ〜。君にそんな傷をつけるとなかなかなやれる奴だね。アザレアはどう思う？」

「力は強そうだな。力押しで戦ったらただでは済まんな」

そついうとアザレアは自分の羽を3本抜き、使い魔を創った。

「正善始に憑いている悪魔について調べてこい」

「」「御意」「」

アザレアが使い魔に命令を出すと、彼らは三方に飛んでいき、ハドレインはなぜか笑っていた。

4話「少女の名は夜空」(前書き)

早くかけた

次回から用語紹介をここでしよう

4話「少女の名は夜空」

この悪魔がということが事実なら昨日のあれは現実？

「そうだ。夢ではない。破損したものは全て直しておいた」

こいつまさか僕の心を読めるのか？

「悪魔。どういう経緯で始と契約したの？」

「っていうかハジメ。なんで悪魔なんて召喚したんだ？」

だから僕に聞かれても………と説明を求めて悪魔のほうをみた。すると悪魔はこつちを睨んでいた。なんで睨んでいるんだ？

「お主。余には夜空という名があるのだ。名で呼ばぬか！」

「あ、それで睨んでたんだのか。夜空、僕も君と契約した経緯と召喚したのがいつなのか知らないんだ。おしえてくれない？」

夜空は名前を呼ばただけで満面の笑みをみせた。

「よし、説明してやろう！その前に始、余にも茶をくれんか」

口調も明るい。名前を呼ばれることはこいつにとっても重要なことなのだろう。

僕がお茶を出すと一口すすってから、夜空は僕、あんみつ、双葉の順に顔を向けて口を開いた。

「まず余は始に召還などされていない。人間をうるついておったとき、大きな車……トラックだったか？に跳ね飛ばされるところをみ

つけたのだ。昨日な」

「ちょっと待って。始に召還されてない？じゃ何で始と契約したの？」

「そうだよ。悪魔は悪魔を召喚したものと契約するのだろ？召還者は誰だよ？」

「っていうか。人間をうつついてたつてのはヘンじゃない？日本語として？」

ひとり、いまはどうでもいいことを質問しているバカもいたが、

「人間とはこの世界のことを指す言葉だ。それに人間には人のいるところという意味があるのだ」

夜空はしつかり答え、

「余は大昔にこの世界に自分の意思でやってきた。それ以来帰っておらんから召還されることなどない。もともとこちらにいるのだから」

僕と双葉は顔を見合わせた。本来悪魔は僕らの世界には長居できないといわれている。その理由は魔力が尽きるからとも、僕らの世界が彼らにとって居心地の悪いところだからともいわれている。

そんな僕の思考をよみとつたのか、夜空は「今からそのことについて説明する」といってまたお茶を一口すすった

「悪魔は人の心に住む。だからこの世界に人の寿命よりは長居しない。契約が済めば代償をもらって冥界に帰ればいいから、契約完了後まで居座る真似はけっしてしない。だがそれは召還されたもの、つまり無理やりこの世界に連れてこられたものの話であって、余のように自分からこっちに来ているとなると比較的長居するものも無

きにしも非ずなのだ。まあ、自分からこっち来るものも目的があつてきている。だから目的が終われば帰る」

夜空は言うべきことは終えたといい、お茶をがぶ飲みした。

僕はそうだったのかと納得し、あんみつはお菓子を食べながらうなずいていた。

だがこの説明でさらなる疑問が生じていることに唯一気づいていた者が、彼女に質問した。

「じゃあ、あなたはどんな目的であたしたちの世界に来たの？」

そう、夜空が言うにはこっちに来ている悪魔には目的があるのだ。

そして夜空自身も自分からこっちの来ているのだ。つまり、彼女には何らかの目的があるのだ。未達成の。

「いいところを突いてくるのだな。えつと「双葉よ」……双葉。むろん、余にも目的がある。大きな野望がある」

「いったいどんなヤボーなんだ」

「とてもわかりやすいぞ」

「余は………」

悪魔ではないものになりたいのだ」

夜空は理解不能なことを堂々と宣言した。

4話「少女の名は夜空」(後書き)

妖説話 The Dragon Which Attracts
A Person のほづもよろしく願います

5話「悪魔は理解できないもの」

「余は悪魔ではないものになりたいのだ」

「……はあ?」「」

夜空は僕らにとって理解のできないことをいった。

「パードウン?」

一人だけ聞き返していたが……。

「だから!悪魔なんてやめたいのだ!」

「……」

沈黙が再び部屋を支配した。当たり前だ。人間は人間をやめることができない。種族というのは仕事ではない。生まれてから死ぬまでは同じものを続けなくてはならないのだ。それが世界の絶対的ルールだ。

「夜空。それは不可」

「人にだってできるのだ。人外である余にできないはずがないのだ!」

「へえ?」

我ながら間抜けな声を出してしまった。

「さっきから、のだ、が語尾についているがそういうキャラ設定なのか?」

「どういうこと?」

「人は死んでから変質するのではない。変質するから人として死ぬのだ」

「つまり、人外になったから人間という種族をやめた。死んだってことになるね？」

夜空はその質問に対して首を縦に振った。どうやらそれであつたようだ。

「すまなかつたな。少し興奮しすぎた」

「……？」

だれにも迷惑かけてないのにだれも気にしてないのに謝つたよ、この子。

「余は死にかけた人と契約して実体を手に入れ、調べごとを続けてきた。今回もそのつもりだったが……始が狙われているとなると傍を離れるのは割と危険だな。始、お主が暇のときは余の調べごとを手伝つてはくれないか？その代わりと言っては何だが余がお主にあだなすものを払うから」

夜空は真剣な目で僕を見つめていた。僕は双葉のほうをみた。すると、

「いいんじゃない、別に。あと夜空。始になんかあつたらただじゃ済まさないから。あんみつ、夜空のことは誰にも言わないでよ」

「あいあいさー」

「じゃあ、帰るわ。始。気をつけてね」

「ばいばい」

「恩にきる」

「また明日」

僕らは気付かなかつた。夜空が何か企んでいるように笑っているの

を。

「久しぶり、サンフラワー。元気にしてた？」

僕は小さな仲間に声をかける。

「……ハドレイン。……どうしたのですか？……ここは悪竜の縄張りですよ。……あなた彼苦手でしょ？」

か細い声で彼女は僕がここに来たことを不審に思っていることを伝えてくる。まあ、いつもはしないことだから当然と言えば当然かな？

「報告に来たんだ。ローズもアザレアもちよつと手が離せなくてね」

「……何の報告ですか？」

「予言した彼のことです」

「……正善始のことですか？」

「そう、彼悪魔が憑いてたよ。知ってた？」

「……やはり何か憑いていましたか。……しかしあれはたぶん悪魔ではないですよ」

「知ってなら教えてくれてもよかったじゃない。で、悪魔でなかったら何なの？」

「……わかりません。……神託では何も見えないので」

サンフラワーでもわからないことがあるんだ。

「……ですが、……おそらく悪竜と同じものかと」

「どうしたって、正体不明じゃないか。じゃあ、僕は帰るよ」

悪竜と同じものか……。かなり厄介だな。ちゃんと作戦練らなきゃね。

「……ごめんなさい」

ハドレインが去った後、サンフラワーはそう呟いていた。

「ご飯だぞ、引きこもり」

「……ひまわりです。……それだと最初と最後しかあってないです。……世話好きな悪竜さん」

悪竜とひまわりはそういつもどりのかけあいをして微笑んでいた。

6話「悪魔でも少女」

「始。そっちのもとつてくれ」

「図書館で大きな声出すな」

「すまん。勝手にわからんもので」

今日は図書館に来ていている。実を言うときのうも学校の図書館で資料を探していた。

最初はネットで調べたら？とおととい提案して使わしてみたところ、目が慣れてなかったらしく倒れた。現在慣れるための特訓をしながら、図書館で資料を探している。

あれ？そつえばきのうも注意したような？

「細かいこと気にするな。老けるぞ」

「細かいことじゃないのだけでも」
本当に今のルールを全然知らない。

双葉たちから帰ってから、夜空はまたいろいろと説明してくれなかったら、当たり前か、などと思わなかったのだろうが。

.....

.....

.....

「最後に人に憑いたのは1000前だったか？」

「いや、僕に聞かれても」

「お主に聞いてない。ひとりごとだ。そう、そのあと実験をして暴走したんだ」

「暴走？」

「そうだ。試しに人でないもの。猿……だったかな？そうそんなのに憑いたんだ」

「へえ」

「で暴走したから……たぶん力を許容範囲以上に使ってしまったから、眠りについたんだろうな。目が覚めたら今だった」

「へえ」

「関心ないだろ？」

「あるよ」

「……お主の考えは余につつぬけなのに、よく嘘がつけるな」

「僕の心を読めるなら、そんなことより、に続けて言いたいことわかるのだよね？」

「……善処しよう。おほん、続けるぞ」

.....

.....

.....

一部だけの回想終了。

内容しか伝えられないのが文章の弱点だと思う。だって夜空の話の方が男っぽいものから少女のようなもの変わったことが伝わらないでしょ？

僕はあの時、「女の子の格好しているのだったら、しゃべり方もそうしないと不自然じゃないかな？」とふと思っていた。

夜空は物分かりがいいとときは思ったが、今日の様子からどうやら勘違いだったらしい。

「う、うるさい」

しゃべり方を見た目に合わせると、性格も合わさるのだろうか？と思えるくらい彼女の口調はみためそのものだった。

「夜空か。だいぶ人間らしい名前だな」

「サンフラワーによると悪魔でないらしいからね」

「やっぱり知ってたのね、あの子」

「君が仕掛けるちょっと前にみたらしいけど……………それって知ってと言える？」

「くだらない言い争いはよせ。情報はそこそこそろった。ローズ、ハドレイン仕掛けるぞ」

神獣たちが動き出す。

7話「襲撃は突然、でも堂々と」（前書き）

これもこれから日曜に投稿させていただきます。

7話「襲撃は突然、でも堂々と」

「めばしい資料は全くなかったな……。無駄足だったか」

結局、昨日今日での収穫は夜空が現代について学べたということだけだった。

僕的にはそれだけでも満足いく結果だったが、早く目的を達成したい夜空からしてみるとなにも成果が出ていないとしか言いようがない。

そのためかなり落ち込んでいるように見える。

「仕方がないんじゃない。夜空が寝ている間にいろいろと変わっちゃったから。ネットで調べるのが今では一番楽だよ？」

「……………早く慣れるように努力する」

「しなくていいわよ、努力なんて。だって、電腦に慣れる前にあなたたちここで死ぬんだもの」

「……！」

突然声が聞こえた、僕らの目の前何もないところから。

だが何もないと思っていたところには女性がいた。

先日、律義に僕に挨拶してから襲ってきた女性——神獣のローズだった。

「……………神の獣。どうやった？」

「答えるわけないでしょ、卑怯者」

「だろうな。始、下がっている。約束通り余がこいつを倒す」

夜空は僕に指示をし、炎を出して戦闘を開始する。ローズも狼のような姿に変わり応戦する。たぶんそれが本来の姿なのだろう。

知能のないゾンビなら戦うことはできただろうが、相手は神獣。僕に戦って勝つ可能性はない。

先日は神獣について何も知らなかった。だから僕は図書館に行った時ついでに調べた。

『^{シンジユウ}神獣』：天界に生息している生き物。また、古来から人間に神の使いとして崇められている生き物。知性は化け物のなかでも極めて高い部類に入り、また高い身体能力ももつ。人間を襲った前例はなく、人間と友好的な関係を築こうとするものが多く、人の姿で活動することが多いらしい。

これが神獣を辞典、ネット、書物などで調べた結果である。

これをみたとき、僕の不幸度のMAXの出来事じゃないかと思った。今まで一度も人を襲ったことのない奴らに狙われるとかいくら不幸でもない。

「くだらないこと頭で整理するな！死にたいのか！」

「い、ごめん」

「あら、あなたもよそ見しないの。死んじゃうわよ？」

「——っ!？」

夜空は民家に塀にぶつかった。もちろん、ドジして壁にぶつかったのではない。

見えない何かに弾き飛ばされたように壁にぶつかったのだ。

「違うぞ、始。見えない何かじゃなくて感知できない何かだ。なるほどさつきは、そいつに運んできてもらったから突然現れたわけだ」

「正解だ。だが手加減はしないぞ」

また突然、今度はカラスのような姿をした化け物が現れる。

「アザレア。邪魔しないでよ。わたしがこいつを殺すの！」

「誰が殺そうが一緒だ。目的はあっちの小僧なのだからな」

「貴様ら。始に手を出すというなら、余が焼き尽くしてやる！！」

頼もしいが、少女に守られる僕はとってもみつともないような気がしてきた。

カラスの化け物はローズの仲間らしい。

「緊張感もて、始。ここは戦場だぞ」

「持ったってしょうがないわよ、正善始」

「そうだ。緊張したところで」

「「「死ぬのは一緒さ」」」

背後からも声が聞こえたのと同時に体に激痛が走った。
後ろから斬られた。

そのまま倒れた僕が見たのは夜空の驚愕の表情と僕を斬ったと思われる狐の姿をした化け物だった。

7話「襲撃は突然、でも堂々と」（後書き）

二次小説が書きたいな

<直訳>

設定を一から作るのが苦痛になってきました。誰か助けて！

8話「夜空の考え」

「感知できないようにする能力を持つのは、僕、ハドレインだよ。
残念だったね、悪魔^{アンノーン}ちゃん」

余は声が出せなかった――

やっとみつけた余の器――

余の悪魔という汚名を返上するための――

余が余の正体に近づくための――

余が余になるための――

道具であり、

共同体である、

余の愛おしき器――

正善始が斬られたからだ。

最初が利用しようと考えた

やっと、見つけた器だったら

だが、あいつが寝ているうちに記憶を覗き見たときから余は変だった

なぜか惹かれた

今までの器ではこんなことはなかった

余はもつと見ていたいと思った

だからもう知っているはずの悪魔をやめるための方法を探し

見つからなかったから気長に探すという理由をつけて始が死ぬまで憑
いているつもりだった

だから守ると約束した

そしていつか訊こうと思った

始さえよければ余と同じにならないか？と

道連れになつてくれないか？と

その始はなぜ血まみれだ？

斬られたからだ

じゃあ誰に斬られた？

神の獣にだ

余はどうすべきだ？

それを訊くのか

「「貴様ら、全員殺す！！！」」

「「「!?」「」」

いきなり目の前の人間が燃えだした。そしていつの間にか悪魔はいなくなっていた。

「うつ」

「何よ、あいつ!」

「憑依したのだろう。だがあの怪我だ、長く持たん」

「（悪竜と同じもの？冗談きつい!こいつのほうが何倍もやばいじゃん!!(」

三匹も神獣はこの時はなにも知らなかった。
夜空^{あくま}の本当の姿について

9話「ひまわり悪竜と憑依」

「……なんだか、悪いことをした気がします」

「……いきなりなに言ってたんだ？お前」

わたしの独り言に疑問を投げかけてきたのは悪竜さんでした。

「……人の独り言にいちいち口出さないでください」

なんとなく反抗したくなったので言ってやりました。

「……。神獣たちはなにしてるんだ？最近狐がお前のところに来てたろ？」

「……気づいていましたか。……しかしながら悪竜さんには関係ありません」

「『悪魔』とその契約者^{うっわ}を退治しに行ったのか？」

……知っていたのではありませんか。……だったら、いちいち聞かなくてもいいではないですか？

「で、さっきの発言は、倒せるわけのない奴を相手させてごめんなさい、同胞よ。みたいな感じか？」

「……………」

わたしは言い返しません。ほとんど事実なので。

「……言っておきますがわたしは好きですよ、三体とも。……神託で『狼、鳥、狐の神の獣を『悪魔』と戦わせよ』とでてしまったから仕方なくやっているだけです。……ところでなぜわかったのですか？」

「『悪魔』が復活していること？」

「……それ以外ないでしょう。」

「茉莉が教えてくれたからだ。別に俺を感じ取ったとかじゃないから安心しな」

「……巫女がですか。……あの陰陽師たちはいったい何がしたいのですか？あなたに」

「いっつな！！ネタばれになる！！」

「……誰に対してですか！……一生あなたには突っ込みを入れないつもりでしたが入れてしまいました。……雷姫さんがいないとペースが持ってかれています。」

「ああ、どうせ知らないだろうから言っというてやるが、『悪魔』も怒らしたら、俺でもただじゃ済まないぞ」

「……それも誰に向かって言ってるんですか！」

僕が覚醒したのはまさに夜空が切れている真っ最中のところだ。
でも、視界に映ったのは神獣たちを圧倒している夜空の姿ではない。
彼らをぼこぼこにしている者の視点だった。

「「おらあ」「」

「くっ！」

ローズはすでにへばっていて、アザレアと呼ばれていたカラスの神獣と狐の神獣も防戦一方であった。

「「……………夜空？」」

「「は、始！」」

僕が夜空に呼び掛けると、彼女は心なしに悲しそうな喜びに満ちた声を上げた。

「いまだ！」

「言われなくても分かっている！」

夜空が隙を見せた瞬間、二体はローズを抱えて逃げて行った。

「「待て！」」

「夜空落ち着いて」

「しかし」

「深追いはよくないよ。あと説明して」

「今どういう状態かを、か？」

「うん」

「では憑依解く」

そついうと全身から力が抜けるような感じが僕を襲い、それと同時に夜空が僕に背を向けた状態で目の前に現れた。
夜空は僕のほうを振りかえり

「すまなかった」

つといて頭をさげた。

10話「夜空の願い」

「本—当に、すまなかった」

「謝られても困るのだけど……………」

現在自宅。

夜空は自分の考えたことから憑依についてまで洗いざらいはぎ、土下座していた。

中身が悪魔でも見た目幼い少女に土下座されると、なんか僕が悪いような気がしてくる。

そんな僕の心情を汲み取った彼女は頭を上げてくれた。

「土下座以上の謝り方を知らんのだ！それなのに土下座をやめろとは、余は何をしたらよいのだ！！」

……………逆ギレではないのか、これ？

「そうだ！逆ギレだ！文句あるか！」

「……………文句はないよ。それより憑依についてもう一回説明してくない？よくわからなかったから」

「心の中では文句が出ているぞ。しかしそれは置いといて、憑依について説明しよう。」

憑依とは、一般的に憑いている悪魔が契約者の体を使い、能力を発現することを指す」

「体を使うだけでは憑依したことにはならないってことだね」

「そうだ。一般的には知られておらんが本物の悪魔はもうずいぶん前から、人に憑くことをやめている。その代わりに『呪魔』という使い魔のようなものを使って人から負の感情を集めている」

「その『呪魔』という奴も体に乗っ取れるから、区別するために憑依と名付けられたと」

「悪魔の中での用語だから人が知っていることはない。『呪魔』による乗っ取りだろうが悪魔の憑依だろうが、乗っ取られる側からすれば同じようなものだからな」

よくわかった。でも一つ気になる。

「なんだ、言ってみろ」

「なんで悪魔たちは、人に憑くつまり人と契約することをやめているのだ？」

「簡単な話だ。わからないお主の頭の出来が心配になるくらいにな」
なんか貶されたのですけど……

「利益があまり出なかったからだ」

「といますと？」

「悪魔が人間にいとそれだけでかなりエネルギーを使うのだ。そのせいでかなり大きな欲望か、深い憎悪心、異常までの狂気を回収しない限り元も取れない。まあ、賢い奴は人の血肉や命を代償として払わして稼ぐなどしていたが、なかなか利益が出なかった」

「だから？」

「……………悪魔はもつと効率よく利益を出したい。だが人間にいてだけで損失が出る。

そこである天才悪魔が、人間は悪魔がいる場所じゃないからエネルギーを使うのだ。

だったら、人間にあるものを使って糧となるものを集めればロスは少ないのではないかと考えて、人の『呪い』という感情から『呪魔』という物を作ったのだ。

この『呪魔』は彼の予想どおり損失はゼロに近かった。

それ以降悪魔は人に憑かなくなった、人間に来なくなった。」

「やっと、わかった。つまりより効率のいい方法が見つかったから効率の悪いほうは捨てられたってことだな」

「やっとわかってくれたか。続きを話すぞ。悪魔は人間にいただけでエネルギーを使う。だが、いるといつても実体がない。だから力がうまく使えない」

踏んだり蹴ったりだね。で、力を使うための憑依でしょ？

「その通りだ。だが憑依された人は体が持たん。憑依をといた瞬間に死ぬ」

僕は死んでないよ？

「余が悪魔とは異なっているからだ。ここにいっても損失はなく、実体があり多少なら力が使え、その上憑依された人も死なない。だから余は悪魔ではない」

なんとなくこの後夜空がということが分かる。僕のほうからも心がのぞけるようになったのかな？

「だったら、余は何なのだ？冥界に本体があるのに悪魔でない。生まれたときから冥界にいるのに悪魔でないのだ。じゃ、余は、余は――」

僕は夜空のセリフをさえぎるように目に涙を浮かべている彼女を抱きしめた。

ただ何も言わずに抱きしめた。

それでも僕の考えていることは夜空に伝わる。

僕と一緒に君を探してあげる。僕が君を救ってあげる。
という僕の本心が。

彼女は泣きだした。

10話「夜空の願い」(後書き)

始い奴な気がする。

11話「いろいろあったが略!？」

どこかの倉庫。いまは神獣の拠点となっている。

「……だからもう良いです。……あなたたちは彼とは戦わないでください」

わたしは彼らに本当のことを話しました。

「ちょっと、サンフラワー！それはないんじゃないかしら！」

ローズは見るからに怒っています。

「いくら君でも許せないな」

ハドレインは表情には出していないが、声に怒気がこもっている。

「……………」

アザレアに至っては何も言いません。

「一度、痛い目に会わなきゃ分かんないかね？」

「たぶんそうだよ」

「覚悟しろ。サンフラワー」

三体はわたしに襲いかかってきました。

神獣たちの襲撃から3カ月たった。

「まとめすぎじゃないのか？夏休みもいろいろあったろ？」

茉——じゃなくて編集さんが面倒くさいので端折るって。

「で、わたしがどうしてこんな姿でここにいるのかっていうエピソードも略されたのか……………」

と子犬ならぬ子狼はしゃべる。突然しゃべらないでくれないかな。家の中だからいいけど外だったら通報されているよ。

「そうだ。戦闘で役に立たない愛玩用のペットはしゃべるな」

「わたしは愛玩用じゃないわよ、夜空！それにわたしが戦えないには始がコントロールできてないからでしょ！」

「自分の無能さを余の半身のせいにするな。始、お前からもなんか言ってやれ！」

「僕から振つといてなんだけどごめんね、ローズ」

「余はスルーなのか、始——！！」

神獣たちローズ、ハドレイン、アザレアの三匹はそれぞれ僕、双葉、あんみつに縛られている。

どうしてこうなったかというと長くなりすぎるので止めてくれと茉莉——じゃなくて編集さんに言われているので説明はしないが、端的に言つと僕の不幸にみんな巻き込まれた結果であらう。

「始が不幸なせいこんなクソ狼と同居とは………やってられねえぜ。あと始もう学校へ行く時間じゃないのか？」

「あっホントだ。じゃあ行ってくるはローズ」

「行つてらっしゃい」

「夜空」

「はいはい」

夜空はだるそうに返事をして僕の中に入った。夜空が来てから遅刻をしてない。

どうやら留年という事態は回避できそうだ。

11話「いろいろあったが略!？」（後書き）

こっちはもうすぐ完結かな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9755v/>

妖説話 Misfortune Always With The Devil

2011年11月13日18時03分発行